中国における坐の様式の変遷過程に関する研究

A STUDY ON CHANGING PROCESS OF SITTING STYLES IN CHINA

李 斌*¹, 舟橋國男*², 奥 俊信*³, 鈴木 毅*⁴
小浦久子*⁵, 木多道宏*⁶

*Bin LI, Kunio FUNAHASHI, Toshinobu OKU,
Takeshi SUZUKI, Hisako KOURA and Michihiro KITA*

It is known that, in ancient China, the sitting styles changed from sitting-on-floor to sitting-on-chair. But the time of turning-point of sitting-on-chair has not been ascertained yet. By dividing into 4 stages, namely, "Age of Sitting-on-Floor", "Appearance of Sitting-on-Chair", "Expansion of Sitting-on-Chair" and "Generalization of Sitting-on-Chair", this study tries to clarify the changing process of sitting styles themselves and its reasons. With the change of sitting styles, the floor structure of building also changed. From the point of view of sitting style, this study tries to clarify the relationship between the change of this behavior style and the change of architectural environment.

Keywords: sitting style, sitting-on-floor, sitting-on-chair, floor structure

坐の様式、床坐、椅坐、床の構造

1. 研究背景

現在、人々の日常生活が椅坐の姿勢で行われている国・地域は多数を占めている。床坐の姿勢を取り入れているのは、日本、韓国、インド、アフリカの一部など少数の国・地域である。日本では、近代における、椅子式の家具とともに、椅坐が日常生活に導入され¹⁾、従来の床坐に適した座式²⁾の住宅様式、室内のしつらい等は大きく変わってきた。現在に至るまで、床坐への回帰の動きもあったが³⁾、今日では、床坐と椅坐とが混在している状況である。

日本において、坐に関する既往研究は数多く見られる。

入澤達吉は、日本人の坐り方を分類した上で、「日本流の坐り方」が、元禄享保頃から採用されたのではないかと推測した。又、医学の角度から、「日本流の坐り方」が身体にどのように影響を及ぼしたのかを検討した⁴⁾。

山折哲雄は、世界中の様々な文化圏における坐る姿勢の類型を考察し、日本における坐の文化・宗教的な意味に触れながら、現在に至るまで坐の変遷を研究した⁵⁾。

芦原義信は、日本の建築特に住宅における、靴を脱ぐという行為から見た「内」・「外」の空間領域上の特徴と日本人の空間意識について研究し⁶⁾、さらに、日本の建築が西欧の建築とは異なって、「床の建築」であり、床に坐っていることが「床の建築」と深い関

わりをもっていると指摘した⁷⁾。

近年、住宅における坐の様式に関する研究も数多く見られる。この中で、例えば、沢田知子は、日本の戸建て住宅における、椅坐・床坐に関する起居様式の具体像、しつらいの配置形態、居室構成上の特徴を研究し、住宅計画の今後の課題に寄与した^{8) 9)}。

近代における日本の住み方は、ある意味で、坐の様式と関わりながら変容してきたのであるが、中国の事情は日本と違い、住み方は椅坐が定着されている前提で変容してきた。中国では、現在一部少数民族の地区を除き、ほとんどの地方で、椅坐の様式で日常生活が行われているが、これは昔から、一貫して続けられてきたのではない。漢民族を中心とした中国では、長い歴史の流れの中で、坐の様式は床坐から椅坐へ変遷したのである。

劉敦楨は、漢代に宮殿・住宅において床坐と履物を履き替える様子を説明し、むしろに坐る床坐の終結は唐代であろうと推測した¹⁰⁾。

藤田豊八は、「胡床」¹¹⁾が古代中国に入った時期を考証し、「胡床」の使用に伴って椅坐が導入されたきっかけが、漢民族と西北騎馬遊牧民族との交流であったと指摘した¹²⁾。

劉敦楨は、建築史の角度から坐の様式の変遷に関わった居室建築空間及び室内家具陳列方式の変遷を研究したが、坐の様式自体の変遷過程の具体的な経緯については触れなかった。しかも、椅坐への

*¹ 大阪大学大学院 博士後期課程・工修

*² 大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 教授・工博

*³ 和歌山大学システム工学部環境システム学科 教授・工博

*⁴ 大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 助教授・工博

*⁵ 大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻 助教授・工博

*⁶ 大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻 助手・工博

Graduate School of Engineering, Osaka University, M. Eng.

Prof., Osaka University, Dr. Eng.

Prof., Wakayama University, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Osaka University, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Osaka University, Dr. Eng.

Research Assoc., Osaka University, Dr. Eng.

定着時期については、概ね、300年余りの両宋時代にあたと指摘した¹³⁾。

また、南北朝には床坐で、椅坐への変遷は唐・五代にあたるという説もある¹⁴⁾。

朱恵良は、古代中国において坐臥の道具としての「席」¹⁵⁾・「牀」¹⁶⁾・「榻」¹⁷⁾の使い方を詳しく説明したが、床坐は隋・唐以前で、椅子に坐る椅坐は宋代以後に流行したと論じた¹⁸⁾。

2. 研究目的・意義・方法

中国における、床坐から椅坐への変遷経緯、特に椅坐の定着時期については未だにはっきりされていない。本研究では、中国における床坐から椅坐への変遷過程を明らかにすることを目的とする。坐の様式は、時間軸に沿って漸進的に変化しており、説明上の区分として、本研究では、中国歴史上の時代の順に、「床坐の時代」、「椅坐の出現」、「椅坐の拡大」、「椅坐の定着」の四段階に区分して、坐の様式及び変遷要因について探究する。なお、坐の様式の変遷に伴い、建築の床の構造の仕組みも変化し、また、本論では詳述しないが、坐の様式の変遷に伴う家具類の変化も認められ、長い時間軸の中で、これらの要素がどのように相互に影響、浸透したのか、坐の様式の変遷という角度から、行動様式の変遷と建築環境変化との関係の解明を試みる。

これらの変遷の背景となった社会・経済・文化面での事情は、もちろん、現代社会とは異なるのであるが、これら坐の様式の変遷とその要因の解明は、生活行動様式理解の一助となろう。

本論では、考古学資料、絵画、文献記録などの調査によって、研究を行う。なお、中国古文を引用する場合、全文を訳す必要性は少ないため、本研究に関した部分に下線を施し、その前後の文脈を含めた日本語の説明を（ ）内に示す。

用語定義

坐：現代日本語では、「すわる」とは「座る」にしているが、「坐る」を使用した既往研究も数多かった。中国語では、「坐」とは「すわる」の意味で、「座」とは席の意味である。本論では、「坐」を含めた中国語の古文を引用するため、「すわる」には「坐る」を使用する。

床坐：床面を身体支持具として臀部を支えて坐る姿勢である。正坐、胡坐、立て膝坐などがある。

椅坐：高座家具（椅子、腰掛け、寝台等）を身体支持具として臀部を支え、すねが大腿とほぼ直角になり床面に垂れて坐る姿勢である。椅子の上で床坐の姿勢をとる場合、即ち、身体支持具を床から椅子に変えただけのものは椅坐とは言えない¹⁹⁾。

坐の様式：床坐と椅坐との総称である。

3. 中国における坐の様式の変遷

3-1. 床坐の時代

殷商（約紀元前16～前11世紀）時代、甲骨文の「席」は 、「宿」²⁰⁾は と書かれた。当時、室内では、「席」が数かれ、人々が「席」に坐っていたと考えられる²¹⁾。

西周（約紀元前11世紀～前770年）、春秋（前770年～前476年）時期、竹製のむしろである「筵」の上に「席」を敷き、室内で坐る家具として坐られた。坐る家具は、商代の寝台、「案」²²⁾を加え、

「幾」²³⁾、屏風も出現した²⁴⁾。

「論語」の中に、孔子の起居行動について、「席不正、不坐。」²⁵⁾と記録された。（孔子は、むしろの位置が、きちんとした方向に向いていなければ、坐らない）。春秋時代、人々が「席」の上に坐っていたことが分かる。

戦国（前475年～前221年）から、秦（前221年～前206年）、漢（前206年～220年）にわたって、床坐の習慣が維持され、「幾」、「案」、睡眠の寝台の高さは低かった。

「莊子」の中に、「南郭子綦、隱幾而坐、仰天而嘘。」²⁶⁾の記録があり、〈南郭子綦が肘掛けにもたれて坐り、大空を仰いで太息をはいた〉。戦国時代の床坐の様子が分かる。

漢代前後から、寝台が日常起居と応接にも使用されるようになった。しかし、この種の寝台（「榻」）は相対的に小さく、普通、一人だけで坐った。寝台の後方とそばには、低い屏風が立てられた。図1に示したように、漢代貴族夫婦の飲食・談話の場面から、当時の床坐の様子が窺われる。

図1 東漢の床坐の様子²⁷⁾

西漢、皇族の日常生活における床坐については、以下のような記録があった。「趙飛燕女弟居昭陽殿……中設木畫屏風……玉幾玉床、白象牙簀²⁸⁾、綠熊席。席毛長二尺餘²⁹⁾、人眠而擁毛自蔽、望之不能見、坐則沒膝其中、雜熏諸香、一坐此席、餘香百日不歇。」³⁰⁾

〈西漢成帝（紀元前32年～前8年）頃、趙飛燕の妹は昭陽殿に住み、……宮殿の中央には木製の絵の描かれた屏風が立てられ、玉几、玉寝台、白象牙で編んだむしろと黒熊の皮製のむしろがある。むしろの毛の長さが四十センチ以上で、人が寝ると毛に埋まり、姿も見られなくなる。坐ると膝も見られなくなる〉。西漢当時、人々は「席」に寝るもしくは坐ることが分かる。

坐る姿勢については、以下の文献にも明言されている。「管寧自越海及歸、常坐一木榻、積五十餘年、未嘗箕股³¹⁾、其榻上当膝处皆穿。」³²⁾〈東漢末期、読書人の管寧が一つの木製の榻に常に坐り、五十年余を経て、足を投げ出して坐ったことがなく、膝のあたったところがすべて破れた〉。坐る姿勢が跪いて坐るもの（もしくは「箕股」）で、坐る家具が「榻」であったということが分かる。

床坐の坐法の種類について、坐・跪・居・箕股があった³³⁾。

3-2. 椅坐の出現

三国（220年～280年）、両晋（265年～420年）、南北朝（420年～589年）では、「席」と「榻」の上に床坐の習慣が継続されていた。当時の婦女の起居生活が描かれた絵画から、「席」と「榻」の上で行われた床坐の様子が見られる（図2、図3）。

図2 東晋の床坐の様子³⁴⁾

しかし、東漢末期から、北西少数民族によって次第に「胡床」と高座家具が伝えられ、上流階層で徐々に使われてきた³⁵⁾。これらの高座家具とともに、椅坐の様式も伝えられてきた。これが、唐代以降床坐から椅坐に変わる端緒となったと考えられる。

図4は、北西少数民族の生活の様子を反映したと考えられる早期敦煌壁画の中、二人の少数民族の男性が「胡床」に坐り、談話中のようである。図5は、一人の漢民族の僧侶が床坐の姿勢で、椅子に坐り、瞑想しているようである。同時に、漢民族の就寝用の寝台及び起居用の寝台（「榻」）の高さが高くなるのに伴い、寝台の上に坐る時、足が地面まで垂れ、椅子坐の姿勢を取り入れやすいようになった（図6）。

「胡床」が持ち運びやすいため、漢民族の戦場にも使われるようになった。“（戴）淵在岸上、据胡床指麾左右、皆得其宜。”³⁶⁾〈西晋、戴淵が岸にあって胡床によりかかり、左右のものを指揮していたが、そのやり方がすべて宜しきを得ていた〉。

図3 北魏の床坐の様子³⁷⁾ 図4 北魏の椅坐の様子³⁸⁾ 図5 西魏の坐の様子³⁹⁾ 図6 東晋の椅坐の様子⁴⁰⁾

隋（581年～618年）、唐（618年～907年）にかけて、床坐の姿勢と起居用の寝台の使用は、まだ主流として広く存在していたが、足を垂らす椅坐の様式は上流階層に広がってきた。唐代、床坐と椅坐を併用した様子は当時、婦女らの日常生活の様子が描かれている絵画から見られる。図7は、宮廷の婦女らが「席」、もしくは椅子・

腰掛けに坐り、休憩・談話しているような場面である。椅子に坐った婦女の身分が最も高いと考えられ、椅子が高い身分の象徴にも使われた。図8は、宮廷の婦女が腰掛け、もしくは「席」に坐り、針仕事をしている場面である。図9は、家庭で婦女らが寝台に坐り、話し合っている日常的な場面である。

興味深いのは椅子に坐っても、床坐の姿勢を取り入れた場合もあり、必ずしも椅坐ではないことである（図5と図9参照）。

図7 唐の坐の様子⁴¹⁾ 図8 唐の坐の様子⁴²⁾ 図9 唐の坐の様子⁴³⁾

唐代になると、椅坐と深い関係を持っている椅子についての記録も現れてきた。

“（顔魯公）奉使李希烈，春秋七十五矣。臨行……命取席固圍其身，挺立一躍而出。又立而藤椅子相背，以兩手握其倚處，懸足点空，不至地三二寸，数千百下。”⁴⁴⁾〈顔真卿は李希烈へ派遣された時に、すでに七十五歳になった、……二つの藤製の椅子を相背にさせた……。これは椅子に関する初見の記録であり⁴⁵⁾、顔真卿が李希烈へ派遣されたのは建中4年（783年）⁴⁶⁾ 故に、8世紀末までには椅子が用いられていたことが窺われる。

その後、“貞元十有三季（797年）、……北海壇二所新置祭器及沈幣双觥、雜器物等一千二百九十二事、……緇床⁴⁷⁾十、内四倚子。”⁴⁸⁾〈唐代の797年、北海壇祭事の時、新しい供え物は1292件で、胡床が十個、椅子が四つある〉という記録もあった。

3-3. 椅坐の拡大

五代（907年～960年）になると、「韓熙載夜宴図」に示されたように、上流階層の宴会の時、長方形の机、四方形の机、長方形の腰掛け、丸の腰掛け、丸の椅子等色々な形の家具が登場し、後代の椅坐家具類型は、唐代末期・五代に大体そろっていた。高座家具と椅坐の様式は普及していた。床坐と椅坐とが併用され、床坐の家具は、「席」でなく、寝台だけとなった（図10）。

北宋（960年～1127年）時期、以前より多く現れた一般庶民の日常生活を主題とした絵画から、その椅坐の様子が分かる。図11は、北宋の一般家庭の婦女が、腰掛けに坐り、赤ちゃんのからだを洗っている日常的な場面である。図12は、婦女らが、寝台に腰掛け、絵画を鑑賞している日常的な場面である。

図10 五代の坐の様子⁴⁹⁾ 図11 北宋の椅坐の様子⁵⁰⁾ 図12 北宋の椅坐の様子⁵¹⁾

五代・北宋初期にかけて、椅子に関する文献記録はさらに数多く見られる。

“同光三年（925年）九月十日、特然修換、材木皆新、棚上有阿彌陀佛一尊、聖僧一坐、椅子一双。”⁵²⁾〈五代の後唐の925年9月10日、寺の建て替え工事の後、二つの椅子が置かれた〉。

“天福八年（943年）秋、出帝幸大年庄還、置酒延廣第。延廣所進器服、鞍馬、茶床、植榻皆裹金銀、飾以龍鳳。”⁵³⁾〈五代の後晋の943年、皇帝が景延廣の家を訪れ、景延廣が皇帝に食器、衣類、鞍馬、茶具、椅子、榻を献上した〉。

“寶儀尚書本燕人……（周）世宗時為翰林學士……太祖改明德門為乾元門……儀因於堂前彫起花椅子二只。”⁵⁴⁾〈北宋初期、寶儀が宅の前に模様のついた椅子を二つ彫り上げた〉。

さらに、北宋初期、上流階層において、椅子等の家具が応接室に使われるようになった。

“（徐）鉉遂徑往其居……老卒往報。徐入、立庭下。久之、老卒遂入取旧椅子相對。鉉遙望見、謂卒曰：但正衙一椅足矣。頃間、李主紗帽道服而出、鉉方拜……主曰：今日豈有此礼。徐引椅少偏、乃敢坐。”⁵⁵⁾〈北宋初期、徐鉉が李後主の家に直行した。待っている時、老兵士が古い椅子を二つ運び出した。徐鉉がご主人に一つだけで結構だと言った。しばらく経つと李主人が出てきて、徐鉉が拝んだ。李後主が今日ではそんな礼儀をやめろと言った。徐鉉が椅子の方向を偏し、ようやく坐った〉。

“趙韓王西京起第、外門皆柴荆⁵⁶⁾……廳事有椅子一双、樣制古朴、保坐分列、自韓王安排、至今不易。太祖幸洛、初見柴荆、既而觀堂庭、以及后圃、哂⁵⁷⁾之曰：此老子終是不純。”⁵⁸⁾〈趙韓王の宅が洛陽の西に位置し、門戸の外にいばらのさくがあり、応接室に椅子が二つあり、見た目が昔風らしく、韓王時期からずっと分けたまま置かれている。宋太祖が洛陽を訪れ、この櫺、応接室の配置、奥の庭を見てから、この人に問題があるなあ、と笑った〉。北宋初期、椅子はまだ通常のものではなかったが、上流階層の応接室に配置されるようになったということが分かる。

また、北宋初期・中期、士大夫等の上流階層に椅坐が流行ってきたにもかかわらず、その家庭の婦女が椅坐にすることは珍しかった。

“徐敦立言：往時士大夫⁵⁹⁾家、婦女坐椅子、兀子⁶⁰⁾、則人皆譏笑其無法度。梳洗床、火爐床家家有之。”⁶¹⁾〈北宋初期・中期、士大夫の家の婦女が椅子、腰掛けに坐ると、みんなに笑われる。家庭ごとに、化粧用の寝台、こんろ付きの寝台があった〉。寝台の上で、化粧等をしていたことから、婦女らの坐る姿勢は床坐に間違いないと推定できよう。

北宋半ばにかけても、「韓熙載夜宴図」に示されたように、一人が机と関係なく椅子に坐る、もしくはただ一人が机の前で椅子に坐るという配置方式がまだ見られる。椅子は単独に設置され、必ずしも机と併用されることにはこだわらなかったのである。

“平明舅姑坐於堂上、東西相向、各置卓子於前、贅者見婦於舅姑、婦北向拜舅於堂下、執算、實以棗栗、升自西階、進至舅前、北向奠於卓上、舅撫之、侍者徹去。婦降又拜舅、畢、乃拜姑……執事者設席於姑之北、南向設酒壺及注杯卓子於堂上……舅姑侍者各置一卓子。上食畢、婦降拜舅、升洗杯斟酒舅卓子上、降、俟舅舉酒飲畢、又拜、遂獻姑、姑受而飲之、飲如獻舅之儀。”⁶²⁾〈舅姑が応接室に坐り、東西対面で、各自の前に机が置かれている、……舅姑侍者の前に各一つ机が置かれ、食事をする〉。これは以前の「老学庵筆記」（注⁶¹⁾参照）の記録と違い、士大夫の家の婦女が椅子に坐るようになった。これは北宋中期に現れたばかりの現象ではないと思われる。

“（韓魏公）特設一卓、覆以繡衣、致玉盞其上、且將用之將酒、遍勸坐客。”⁶³⁾〈韓魏公がわざわざ一つ机を置かせ、その上に玉のコップを置き、坐っているお客さんたちにお酒を勧めた〉。必要であれば机が臨時的に設置されたということが分かる。

この段階では、「席」の上の床坐の様子は見当たらず、床坐の家具が寝台となった。椅子に伴った椅坐はまだ社会の一部、特に上流階層の一部にとどまり、社会全体には普及していなかった。

3-4. 椅坐の定着

北宋後期、「清明上河図」に示されたように、机・腰掛け等椅坐到適した家具が都市の店舗で広範に使用された。しかも、飲食店の机・腰掛けの使用に一つの新しい変化も現れた。二人が一つの机をはさんで各自の腰掛けに坐り、交流しやすい「対坐」するようになったのである（図13）。当時の都市の中の飲食店に関する文献記録にも、この現象が記されている。

“州東仁和店新門里会仙酒樓正店、常有百十廳館、動使各各足備、不尚少闕一件。大抵都人風俗奢侈、度量稍充、凡酒店中不論何人、止兩人對坐飲酒、亦須用注、碗一付……”⁶⁴⁾〈会仙酒樓の店内には、みんなが二人つづ対面に坐って酒を飲むという形で配置された〉。

“石曼卿磊落奇才、知名当世、氣貌雄偉、飲酒過人、有劉潜者、亦志義之士也、当与曼卿為酒敵、聞京師沙行王氏新開酒樓、遂往造焉、對飲終日。”⁶⁵⁾〈石曼卿と劉潜が、王氏が酒樓を開店したことを聞き、足を運び、一日対坐で酒を飲む〉。

北宋以前、中国の都市道路両側では、閉鎖的な土壁が立てられ、商業活動は厳しく制限された。北宋になると、商品経済が活発になり、土壁が段々壊され、道路へ直接に面する店舗が数多く現れ、都市生活が多彩になった⁶⁶⁾。「清明上河図」等の絵画から、当時空前に繁栄した都市生活の具体像が分かる。飲食店の数多くの出現は

その中の一側面であった。「対坐」の配置方式は、この時期に関する他の文献記録と絵画にみられる家庭・官舎・寺院には発見できなかったことから、「対坐」が最初に現れたのは、都市の店舗、特に飲食店における一般的な配置方式であったと考えられる⁶⁷⁾。

「対坐」は、北宋当時、大幅に発達した商品経済、かなり豊かになった都市生活、空前に発達した庶民文化等という時代背景と緊密に関わったのではないかと考えられる。

図13 対坐の様子⁶⁸⁾

図14 対坐の様子⁶⁹⁾

最初、家庭に「対坐」が現れたのは、1100年頃のことであった。家で宴会する時、夫婦二人が各自一つの椅子に坐り、中央に一つの机が置かれ、歌舞を観賞している様子が初めて見られる(図14)。白沙宋墓の建造年代は1100年頃であり⁷⁰⁾、「司馬氏書儀」が書かれた年代よりわずかに十数年後(注⁶²⁾ 参照)のことであるから、家庭で夫婦対坐の配置は白沙宋墓の建造時期、即ち北宋後期に、まだ流布し始めたばかりであったと推定できよう。

飲食店の「対坐」の配置方式がようやく家庭に影響を及ぼしたのであろう。家庭での日常飲食の時、椅子・机は分離されたものではなく、一体になり、システムとして成り立ったと言える。

北宋後期・南宋初期の絵画から、椅坐に基づいた室内の家具の配置が社会全体に一般化されたことが分かる。「清明上河図」はこの中の一つの好例である。高級料亭から一膳飯屋まで、家具の配置は、いずれも、四角い机と腰掛けの組み合わせで、現在と基本的に同じであった。椅坐の様式と椅坐に適した家具の配置が都市・農村の店舗に広く普及した。

又、家庭にも、椅坐に適した家具の配置が一般化された。対称と非対称との二種類がある。起居室・応接室には、屏風の前方中央に二つの椅子が置かれ、両側に各四つの椅子が並べられた(図15)。もしくは、屏風の前に、二つの丸い腰掛けが置かれ、賓主対坐となった。書斎、寝室には、非対称の配置が採用された(図16)。

図15 南宋の室内家具配置⁷¹⁾

図16 南宋の室内家具配置⁷²⁾

南宋初期、民間の家庭における婦女の日常生活について、以下のような記録があった。“今猶有高鏡台、蓋施床則與人面適平也。云禁中尚用之、特外間不復用爾。”⁷³⁾ (今なお見られている高い化粧台が、寝台の上に置かれると、人の顔の高さと等しくなる。これが宮廷ではまだ使用されていて、外部ではもう使用されていない)。

これに関連して、北宋後期の椅坐に適した高いたんす、高い「幾」も初めて発見され、寝台の上に置かれていた、床坐に適した化粧台、衣桁、たんす等の家具が高くなり、床に置かれるようになった⁷⁴⁾。

北宋後期・南宋初期、民間の家庭で婦女が化粧する等の日常生活が床坐ではなく、椅坐で行われたと推定できよう。

この段階では、即ち、北宋後期・南宋初期、椅坐は社会全体に普及し、椅坐に適した新しい家具が数多く誕生し始め、机・椅子等の家具の配置方式は、システムとして、形成され始めた。

しかし、その後、「席」あるいは寝台上での床坐の様子が完全に消えたわけではなかった。少なくとも、南宋初期、農村の家庭に、この床坐の様子がまだ見られる(図17)。

図17 南宋初期の床坐の様子⁷⁵⁾

4. 坐の様式と床の構造

中国古代建築における、床の構造についての変遷は、高床と非架構床との二種類から、非架構床の一種類への移り変わりであると考えられる。このような構造的な変遷が、人間の坐の様式の変化と深く関わっていると考えられる。墨子は「宮室之法、高足以避濕潤」と語っている。宮殿を建てる際、湿気の上昇を防ぐため、地面の上に床を架構し、下に空気を通らせるという意味である。このような

高床構造はまさに床坐の行動方式に適している。漢代の画像磚から、当時の高床構造の様子が現れる（図18）。床坐の習慣が継続された南北朝でも、同じく高床の構造であった（図19）。

図18 漢代の床構造⁷⁶⁾

図19 南北朝の床構造⁷⁷⁾

唐代になると、地面にタイルを舗装した、非架構床の構造をもつ建物が多数現れ、絵画等の資料から、高床の姿はほとんど見出すことができない（図9参照、図20）。この構造の変化が椅坐の定着より早かった理由としては、坐る家具としての寝台の存在にほかならない。寝台が床坐と椅坐ともに使用され、これによって、人間の身体が床から離れるようになり、坐るための快適さが保障されたわけである。その上、椅子の使用によって、湿気が体に影響するのを防ぐための高床式構造の必要性はさらに少なくなってしまったのである。非架構床の数多くの出現と当時徐々に流行してきた椅坐の様式との関わりは否定できないと思われる。

図20 唐代の仏光寺⁷⁸⁾

図21 宋代の床構造⁷⁹⁾

椅坐の様式が社会の全体に普及した北宋後期から、湿気を防ぐための高床の存在意義は失われてしまったので、建物の土台は土、石材、煉瓦等で造られ、非架構床の構造に変わった。「营造法式」⁸⁰⁾の規定によって、架構でない「須弥座」⁸¹⁾の床の構造が定着した。宋以降、元、明、清に至るまで、このような中国古代建築の床の構造の形式が続けられた（図21、図16参照）。

最初のうち、椅子と椅坐の導入のきっかけは、漢民族と北西少数民族の交流・融合だったということであるが、椅坐が次第に拡大・定着した最終状況まで、坐の様式と床の構造との二つの要素は相互に影響し、要因となり働きかけたと思われる。椅坐が普及してきた過程の中で、床坐に適した高床の存在意義は次第に希薄になってしまった。いわば、坐の様式（行動）が床の構造（環境）へと働きかけたのである。一方、非架構床の上では、床坐よりも、むしろ椅坐が適合し、このように床の構造（環境）から坐の様式（行動）への逆の働きかけもあったのである。大きな流れを見ると、人間は能動的に椅坐もしくは床坐という行動様式を選んだり、椅坐もしくは床坐に適した家具を配置し、高床もしくは非架構床という環境をつくりたりして、最終的に、床坐をやめて、椅坐を採用したのに伴い、家

具類のシステムを変化させ、「营造法式」によって「須弥座」を規定した。したがって、人間・環境・行動は分離された独立の極ではなく、千年近くの間の変化の中で、トランザクショナルなシステムの全体として統合され、新たなシステムに変わっていったのである⁸²⁾。

5. まとめ

・坐の様式の変遷過程（表）及び要因

唐代・五代頃以前、古代中国人の坐の様式は主に床坐であった。東漢末期から両晋・南北朝にかけて、北西少数民族から伝えられてきた椅坐の様式は、長い歴史の流れの中で、床坐と併用された。北宋後期・南宋初期に至って、椅坐の様式は社会全体に広がり、ようやく商・周以来の千年近くにわたった床坐の様式に代わった。

表 坐の様式の変遷過程

段階	西暦	時期	坐の様式	床の構造	家具類型
床坐の時代	約紀元前16-前11世紀	商		不明	
	約紀元前11世紀-前476年	西周春秋			
	前475年-前221年	戦国	床坐	高床	席、簾、寝台（榻）、案
	前221年-前206年 前206年-220年	秦 西漢		非架構床	
椅坐の出現	220年-280年	三国	床坐	高床	席、簾、寝台（榻）
	265年-420年	両晋		非架構床	胡床、椅子、腰掛け、案
	420年-589年	南北朝	椅坐		
	581年-618年 618年-907年	隋 唐			
椅坐の拡大	907年-960年	五代	床坐	非架構床	椅子、腰掛け、寝台（榻）
	960年-1100年	北宋中期	椅坐		案、机
椅坐の定着	1100年-1127年	北宋後期	椅坐	須弥座	椅子、腰掛け、寝台（榻）
	1127年-1190年	南宋初期			案、机

椅子と椅坐の出現のきっかけは、東漢末期からの漢民族と少数民族との交流・融合である。椅坐の定着には、宋代、発達した商品経済、豊かになった都市生活などの時代背景と緊密に関わったのではないかと考えられる。

・床坐の特徴

中国における、床坐は、床面に坐るか、もしくは寝台に坐るかという二種類があった。中国の床坐とは、「寝台坐」でもあった。坐る家具としての寝台の存在によって、非架構床の出現は早かったのではないと思われる。

・坐の様式と床の構造

中国古代建築の床構造の変遷が坐の様式の変遷と緊密に関わったと考えられる。人間・環境（床の構造）・行動（坐の様式）は互いに分離することは不可能なものであり、トランザクショナルなシステムの全体として統合され、新たなシステムが生まれたのである。

・日中環境行動の比較

日本では、古代の建物に土間があり、人が坐臥場所だけに板敷を設けたという形から、現在、全面に畳を敷き詰めるという形へ変わった⁸³⁾。この床構造の変化は、中国の床構造の変化と比べれば、本質的な変化はなかったと言えよう。床坐も終始主流として定着した。床坐（行動）と床の構造（環境）とは一つの安定したシステムではないかと思われる。中国では、坐の様式（行動）と床の構造（環境）ともに大きな変化が現れ、新たなシステムに変わったのである。

注釈・参考文献

- 1) 「建築大辞典」彰国社 1993年6月 p76「椅子式」とは「机、椅子、ベッドなどを使用する生活様式。我が国の伝統的な生活様式としての座式に対していわれる。古くからヨーロッパを中心に行われており、我が国でも古代から仏教風や宮殿風の椅子があったが、本格的に導入されたのは明治年間で、官公庁、学校、事務所、映画館、上流住宅などで始まった。」とされている。
- 2) 前掲書1) p632 「座式」とは「生活様式の一。椅子やベッドなどを使わず、床の上に直接座することを生活の基本にするもの。日本の伝統的生活様式もこの一つである。家具および調度として移動容易な座布団や短足の机、卓などが用いられる。」とされている。
- 3) 沢田知子 「イス坐家具導入過程からみた起居様式の指向性」 日本建築学会計画系論文報告集 第438号 1992年8月 p35、p39
- 4) 入澤達吉 「日本人の坐りに就きて」 「史学雑誌」 第31編第8号 大正9年8月
- 5) 山折哲雄 「「坐」の文化論」 講談社 1984年12月
- 6) 芦原義信 「街並みの美学」 岩波書店 1990年3月
- 7) 芦原義信 「続・街並みの美学」 岩波書店 1990年11月
- 8) 沢田知子 「起居様式の指向性別による「しつらい」配置形態の特徴」 日本建築学会計画系論文報告集 第452号 1993年10月
- 9) 沢田知子 「起居様式の指向性別による居室構成ならびに住まい方の特徴」 日本建築学会計画系論文集 第468号 1995年2月
- 10) 劉敦楨 「大壮室筆記」 「中国营造学社匯刊」第三卷第三期 1932年
- 11) 胡床：中国古代 北西少数民族から伝えられた軽便な折りたためる坐具。胡：中国古代漢民族が北西少数民族に対して用いた総称。床：中国語で寝台を指す。
- 12) 藤田豊八 「胡床につきて」 「東西交渉史の研究・西域編及附編」 岡書院 1933年に3月 p158
- 13) 劉敦楨編 「中国古代建築史」 中国建築工業出版社 1984年6月
- 14) 「中国建築史」編集組編 「中国建築史」 中国建築工業出版社 1986年7月 p118
- 15) 席：むしろ。
- 16) 牀：寝台、同中国語の「床」。
- 17) 榻：低い寝台。
- 18) 朱恵良 「中国人の生活と文化」 二玄社 1994年2月 p136
- 19) 前掲書1) p76 「椅子座位」とは「人体計測の基本になる姿勢の一。椅子に腰掛けたときの姿勢をいう。従来は椅（い）座位と呼んでいたが、日本人間工学会は計測のときは「椅子座位」と呼ぶことを提案し、次のように規定している。「背すじを自然に伸ばした姿勢で、腓（ひ）骨頭の高さに合わせた台の上に腰掛ける。頭部は耳眼水平位で、目は前方を注視する。左右の大腿をほぼ平行にし、手は軽く握って大腿上面に置く。足底は床面に平らに着け、膝の角度はほぼ直角になるようにする。」と定義された。
- 20) 宿：宿る。
- 21) 前掲書13) p31
- 22) 案：長形の机。
- 23) 幾：小さい机。
- 24) 前掲書13) p39
- 25) (春秋) 孔子著 吉川幸次郎注 「論語・郷党第十」 朝日新聞社 1977年1月
- 26) (戦国) 莊周 「莊子・齊物論第二」 「百子全書」 光緒紀元夏月 湖崇文書局
- 27) 李文信 「遼陽発現の三座壁画古墓」 「文物参考資料」 1955年第5期
- 28) 簾：むしろ。
- 29) 西漢では、1尺=0.23～0.234メートル、二尺餘は四十センチ以上である。
- 30) (漢) 劉歆著 向新陽・劉克任校注 「西京雜記校注・照陽殿」 上海古籍出版社 1991年5月
- 31) 箕股：箕踞ともいう。両足を箕の形に投げ出して坐る。無作法な坐り方。
- 32) (西晋) 陳寿 「三国志・魏志・管寧伝」 (宋紹熙刊本)
- 33) 前掲書12) p143
- 34) (東晋) 顧愷之 「女史箴図」により作成
- 35) 前掲書12) p158
- 36) (南北朝・宋) 劉慶義 「世說新語・自新」 (四部叢刊本)
- 37) (南北朝・北魏) 木版漆画 「列女古賢図」により作成
- 38) (南北朝・北魏) 敦煌壁画257窟「須摩提女縁品」により作成。この窟は

- 敦煌石窟初期のもので、漢民族の影響はまだほとんど受けていなかったと考えられる。この壁画は外道の裸身男性の者が仏に帰依したという物語である。
- 39) (南北朝・西魏) 敦煌壁画285窟 「説法図」により作成。西魏大統4-5年(538-539年)頃完成したこの窟に中原様式が強く反映されたと考えられる。
- 40) 同注34)
- 41) (唐) 周昉 「揮扇仕女図」により作成。本図では省略したが、右端の椅子に坐っている女性は付人に世話されており、高貴の人物と判断される。
- 42) (唐) 張萱 「搗練図」により作成
- 43) (唐) 敦煌壁画217窟 「法華経變」により作成
- 44) (北宋) 王謙 「唐語林」巻6
- 45) 宿白 「白沙宋墓」 文物出版社 1957年9月 p101
- 46) (後晋) 劉昫 「旧唐書」12巻「徳宗紀」によると、“(建中)四年春正月……庚寅李希烈陷汝州、執州将李元吉而去、東都震駭……甲午遣顔真卿宣慰李希烈軍。”と記録された。783年春正月、李希烈軍が汝州を攻略し、州将李元吉を捕まえ、東都を驚かせた。顔真卿がなだめるため、そこへ派遣されたという。
- 47) 繩床：胡床の一種類、縄で編んだ。
- 48) (清) 王昶 「金石萃編」巻103 「濟甯南北海壇祭器碑」(嘉慶刻本)
- 49) (五代) 顧閎中 「韓熙載夜宴図」により作成。この絵は南唐(902-970年)の宰相韓熙載が宴を催した場面の真実に近い描写だとされている。
- 50) (北宋) 「浴嬰図」により作成
- 51) (北宋) 「仕女梅妝鏡」 「藝林月刊」50期 中国画学研究会
- 52) 前掲書48) 巻119 「慈州武安県定晋山重修古定晋輝禪院千佛邑碑記」
- 53) (北宋) 歐陽修編 「新五代史記」巻29 「景延廣傳」
- 54) (北宋) 丁謂 「丁晋公談錄」(涵芬樓排印說郛本)
- 55) (北宋) 王銍 「默記」
- 56) 柴荆：いばらのさく。
- 57) 晒：笑う。
- 58) (北宋) 張舜民 「画墁録」(稗海本)
- 59) 士大夫：中国封建時代の官僚、時に読書人をも含む。
- 60) 兀子：低い腰掛けである。
- 61) (南宋) 陸游 李劍雄・劉徳樞校 「老学庵筆記」巻4 中華書局 1979年11月 p47 この書は南宋初期の淳熙年間(1174-1190年)に書かれたと考えられている。
- 62) (北宋) 司馬光 「司馬氏書儀・婚儀」巻4「婦見舅姑」 司馬光は北宋哲宗元祐元年(1086年)に死去した。この書は彼晩年の著作だと考えられる。
- 63) (北宋) 彭乘 「墨客揮犀」巻7(稗海本)
- 64) (北宋) 孟元老 「東京夢華録」巻4 「会仙酒楼」(元刊本)
- 65) (北宋) 歐陽修 「帰田録」巻2
- 66) 賀業鉅 「中国古代城市規劃史論叢」 中国建築工業出版社 1986年9月 p200
- 67) 前掲書45) p94
- 68) (北宋末) 張擇端 「清明上河図」により作成。この絵は、北宋後期の宣和年間(1111-1125年)、首都である開封の繁華な状況を描いた有名な絵である。しかし、この絵には椅子は見当たらない。
- 69) 前掲書45) 版図22により作成
- 70) 前掲書45) p81
- 71) (南宋初) 趙伯駒 「漢宮図」により作成。この絵が高宗(1127-1162年)に宮廷画家に任命された時、描かれたと考えられる。
- 72) (南宋) 「村童閑学図」(明・仇英模写)
- 73) 前掲書61) p47
- 74) 前掲書45) p94
- 75) (南宋初) 馬和之 「孝経図」
- 76) 「江蘇銅山画像碑」前掲書13) p70
- 77) 「洛陽寧懋石室石彫」前掲書13) p88
- 78) 仏光寺は現存の唐代の建物で、後代の建替が行われても、変えられたところが少なく、当時の様子のままであると考えられる。
- 79) (北宋末南宋初) 李唐 「晋文公復国図」により作成
- 80) (北宋) 李誡 「营造方式」：北宋崇寧二年(1113年)、政府が建築物の建造を管理するため、建築設計・構造・材料・施工に関した建築基準法として発布した。
- 81) 須弥座：土、石等で建てられた中国古代建築物の土台。
- 82) 舟橋國男 「環境行動論の視点から」 「建築雑誌」 1997年6月号
- 83) 「古事類苑・居處部十六・床」 吉川弘文館 1969年7月 p1063

(1998年5月8日原稿受理、1998年10月22日採用決定)